

食の外部化に関する研究

第三報 母の就労形態と食行動・意識

西 脇 泰 子・松 永 久 子・草 野 愛 子

A Study on the Socialization of Dining

III. The Impact of Maternal Employment on Family's Dining Behavior and Consciousness

Yasuko Nishiwaki, Hisako Matsunaga and Aiko Kusano

1. 緒 論

既婚女子の就労の増加は、婦人の外出増・家庭からの解放、家事時間の減少をもたらした。加えて最近の急速な食品産業、外食産業の高度成長は食の外部化を促進し、この傾向を一層容易にしている。

このような社会情勢のなかで母の就労は家族の食生活や栄養状態に多大な影響を及ぼしていると考えられるが、従来このことに関する報告では調理時間、共食回数¹⁾、調理済み食品の利用度等²⁾が断片的にとりあげられてきたにすぎない。

我々は、食の外部化に関する研究において第一報³⁾では外食の一般的状況について、第二報⁴⁾では外食を中心とした女子短大生の食生活状況及びその意識とあわせてその背景となる生活環境及び生活状況を明らかにした。今回は家計調査年報⁵⁾⁶⁾⁷⁾において外食費が全国諸都市の中で上位にある岐阜市を対象として、母の就労と母自身及びその子の食行動・食生活意識とのかかわりを明らかにする目的をもって次の調査を行った。

2. 調 査 方 法

1) 調査地域及び対象

岐阜市内の地域特性の異なる3地域(商住混合、住宅、新興住宅)よりそれぞれ小学校1校を選び、1～6年の児童の母親と高学年児童を調査対象とした。

配布数1,298に対し、有効回答数1,057、有効回答率は81.4%であった。

調査対象の属性は表1のようである。

i) 家族類型

核家族が61.2%、世代家族が27.2%で、昭和60年国勢調査⁸⁾における核家族76.0%、世代家族24.0%、岐阜市の核家族73.6%、世代家族26.4%のいずれに対しても世代家族の割合が高かった。

ii) 家族人数

家族人数の平均は4.17人で昭和60年国勢調査⁸⁾における全国の3.23人、岐阜市の3.29人よりかなり多いが、これは子どもをもつ家庭の集団であるためと思われる。

家族数4人は38.3%、5人は24.3%で、4ないし5人が大半を占めた。

iii) 母の年令・母の就労形態

母の年令は30歳代77.0%、40歳代16.9%であった。専業主婦は38.8%、内職も含めて何らかの仕事を持っているものが56.0%であった。また、昭和59年総務庁統計局「労働力調査⁹⁾」による有配偶者の労働力率は51.1%で本調査の方が若干高いが、これは本研究の対象者が30歳代を中心とした年代層であるためと思われる。また、父の職業は管理職を含むサラリーマンが65.8%、個人業主19.0%であった。

なお、小学校教育の場としての制約上、収入・学歴等の属性をあきらかにすることはできなかった。

2) 調査時期

昭和59年11月29日～12月21日

3) 調査方法と調査項目

母親については留置法によるアンケート調査を行い、児童についてはあらかじめ用意したメモを用いてその場で記入させ回収した。

調査項目は母については、昼食状況、食物摂取状況、家族そろっての外出回数、共食状況、健康に関する自覚症状、食生活意識等、児童については食物摂取状況、共食状況、健康に関する自覚症状等である。

なお、2項目間のかかわりをみる場合は不明を除いたものについて統計処理を行った。

3. 調査結果及び考察

1) 母親の昼食状況

主婦の平日(月～金曜日)5日間の昼食について家庭内食と家庭外食を比較した。ここでの家庭内・外食³⁾とは食事の場より調理の場をより重視し分類したものである。

結果は表2-1のようで、全体として家庭内食は77.0%、家庭外食は19.7%と家庭内食の割合がかなり高かった。これを就労形態別にみると家庭内食は自営79.5%、専業主婦87.3%、内職91.8%の順に高く、パートはその中間で63.9%、常勤は最も低く36.6%であった。その中で常勤全体の19.1%、パート5時間以上の36.8%、パート5時間以下の32.3%が自分で調理したものを自宅で食べており、

表1 調査対象の属性

		数	割合(%)
家族類型	核家族	647	61.2
	世代家族	287	27.2
	不明	123	11.6
家族人数	2人	15	1.4
	3人	69	6.5
	4人	405	38.3
	5人	257	24.3
	6人以上	199	18.9
	不明	112	10.6
就業者数	1人	350	33.1
	2人	456	43.2
	3人	71	6.7
	4人	37	3.5
	不明	143	13.5
母の年令	20歳代	21	2.0
	30歳代	814	77.0
	40歳代	179	16.9
	50歳代	9	0.9
	不明	34	3.2
母の就業	常勤	128	12.1
	パート5時間以上	106	10.0
	パート5時間以下	52	4.9
	自営業	127	12.0
	内職	180	17.0
	専業主婦	409	38.8
不明	55	5.2	

表 2-1 母の昼食状況と就労形態

		常勤	パート5時間以上	パート5時間以下	自営	内職	専業主婦	
総数(人)		963	122	100	52	120	175	394
延べ食事回数割合(%)		4815	610	500	260	600	875	1970
		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
食	(1)自分で調理して	2508	116	184	84	386	503	1235
		52.1	19.1	36.8	32.3	64.2	57.5	62.7
	内食(2)残り物やできあいで	982	44	76	40	75	291	456
		20.4	7.2	15.2	15.4	12.5	33.3	23.2
べ	(3)自分で作った弁当で	217	63	59	42	16	9	28
		4.5	10.3	11.8	16.2	2.7	1.0	1.4
内食小計		3707	223	319	166	477	803	1719
		77.0	36.6	63.8	63.9	79.5	91.8	87.3
た	(4)出前や持ち帰り弁当で(自宅)	92	8	6	4	43	8	23
		1.9	1.3	1.2	1.5	7.2	0.9	1.2
	外食(5)出前・できあい弁当で(自宅外)	178	87	27	22	24	3	15
		3.7	14.3	5.4	8.5	4.0	0.3	0.8
た	(6)勤務先食堂で	372	220	104	41	5	2	0
		7.7	36.1	20.8	15.8	0.8	0.2	0.0
	(7)レストラン・飲食店などで	308	58	32	17	34	39	128
	6.4	9.5	6.4	6.5	5.7	4.5	6.5	
外食小計		950	373	169	84	106	52	166
		19.7	61.1	33.8	32.3	17.7	5.9	8.4
食べなかった		58	9	4	10	7	6	22
		1.2	1.5	0.8	3.8	1.2	0.7	1.1
その他		100	5	8	0	10	14	63
		2.1	0.8	1.6	0.0	1.7	1.6	3.2

表 2-2 母の家庭外食と就労形態

	常勤	パート5時間以上	パート5時間以下	自営	内職	専業主婦
延べ食事回数割合(%)	373	169	84	106	52	166
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
出前や持ち帰り弁当で(自宅)	95	33	26	67	11	38
出前・できあい弁当で(自宅外)	25.4	19.5	31.0	63.2	21.2	22.9
勤務先食堂で	220	104	41	5	2	0
	59.0	61.6	48.8	4.7	3.9	0.0
レストラン・飲食店などで	58	32	17	34	39	128
	15.6	18.9	20.2	32.1	75.0	77.1

これは中小企業の多い中都市岐阜の地域性のためと思われる。

また、家庭外食については常勤61.1%、パート5時間以上33.8%、パート5時間以下32.3%で内職・専業主婦はそれぞれ5.9%、8.4%と低く、自営はその中間の17.7%で有職者は高い割合を示した。次に外食の内訳をみると表2-2のようで、常勤、パート5時間以上、パート5時間以下では勤務先食堂が最も高く、それぞれ59.0%、61.6%、48.8%で次いで出前・できあい弁当、レストランの順であった。自営では出前、できあい弁当が63.2%、内職・専業主婦ではレストラン・飲食店が75.0%、77.1%で就労形態による相違がみられる。

2) 家族外食

表3に示すように家族外食は月1回以上が45.8%で半数近くを占めていた。また、佐藤ら¹⁰⁾の盛岡・仙台・福島における小・中学生をもつ母親の調査では月1回以上が40.5%でこれと比較すると本調査では5.3%高い。

また、全国の人口5万人以上の都市に居住する世帯人員2名以上の普通世帯（69歳以下）を対象とした国民生活センターの調査¹¹⁾では51.2%で、本調査より5.4%高かった。前者は調査対象の条件が近似していること、後者は全国調査であるが外食率の高い首都圏、近畿地区が約50%を占めていることから、既にのべた外食の高い岐阜市の地域特性を示していると考えられる。就労形態別にはめったにしない・年数回がどの職種も50~60%であったが、外食回数が月に1~2回では専業主婦が、月3~4回では常勤・自営が高く、総体として家族外食は常勤・自営に多く、内職は少なく、パート・専業主婦はその中間であると考えられた。また、核家族は月1回以上のものが52.0%であるのに対し、世代家族は36.8%で核家族の方が外食回数は高かった。

表3 就労形態と家族外食

	総数	割合(%)	家族外食			
			めったにしない	年数回	1~2回	月3~4回以上
総数	985	100.0	180	354	371	80
			18.3	35.9	37.7	8.1
常勤	125	100.0	23	41	39	22
			18.4	32.8	31.2	17.6
パート 5時間以上	105	100.0	24	40	34	7
			22.9	38.1	32.4	6.6
パート 5時間以下	50	100.0	11	12	22	5
			22.6	33.5	36.1	7.8
自営	124	100.0	18	47	39	20
			14.5	37.9	31.5	16.1
内職	179	100.0	34	74	64	7
			19.0	41.3	35.8	3.9
専業主婦	402	100.0	70	140	173	19
			17.4	34.8	43.0	4.8

X²=44.0868*
*有意水準0.1%

母と子、父と子の外食は年数回またはほとんどないが80%以上で少ないが、母と子による外食は外食したついでに、父と子による外食は母が不在または都合の悪いときに行われていることが多かった。

3) 母と子の栄養バランス得点

バランスのとれた栄養は質と量の両面から考えられなければならないが、本調査のように母、子共の調査では量を把握することはきわめて困難である。そこで我々は、昭和57年国民栄養調査¹²⁾で用いられた簡便法を採用した。すなわち朝・昼・夕ごとに6つの基礎食品群に分け、食べたか食べないかの解答を求め点数化し、点数の高いほど栄養バランスがよいと判定するものである。この方法からは栄養のバランスがよい世帯ほど栄養素の充足率が高いという結果が得られている。

i) 母の栄養バランス得点

結果は図1に示したようで朝・昼食については4点をピークに5~6点の高得点者が少なくなる傾向を示したが、夕食は5~6点が69.7%と高く、朝・昼食より栄養的に優れていた。就労形態とのかかわりをみると朝・昼・夕とも異なった傾向を示し、朝食においては5~6点の高得点者が専業主婦で42.0%と高く、次いで常勤の35.4%でその他は30%前後であった。昼食における5~6点の高得点者は常勤で50.0%、内職25.0%で他は30%前後であった。常勤の高得点はバランスのよい職場の給食をうけていることや外食での栄養的選択によるものと考えられる。夕食では5~6点の高得点者が多く専業主婦で75.6%、最も低い自営でも62.

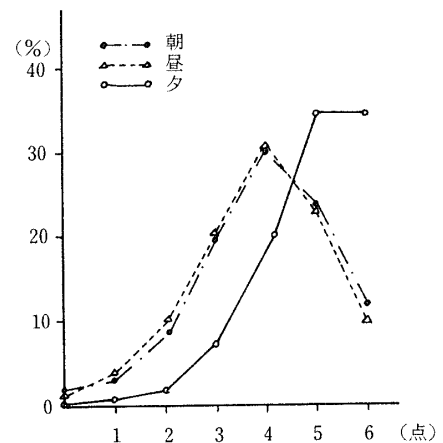


図1 母の栄養バランス得点

表4 就労形態と栄養バランス得点

		1日の栄養バランス得点						
		0	1	2	3	4	5	6
		8	9	10	11	12	13	14
		15	16	17	18			
総数	数	973	76	123	233	271	208	62
	割合(%)	100.0	7.8	12.6	23.9	27.9	21.4	6.4
常勤	数	125	12	13	25	35	26	14
	割合(%)	100.0	9.6	10.4	20.0	28.0	20.8	11.2
パート5時間以上	数	103	8	18	28	32	13	4
	割合(%)	100.0	7.8	17.5	27.1	31.1	12.6	3.9
パート5時間以下	数	52	5	10	8	15	11	3
	割合(%)	100.0	9.6	19.2	15.3	28.9	21.2	5.8
自営	数	122	13	19	30	35	18	7
	割合(%)	100.0	10.7	15.6	24.6	28.6	14.8	5.7
内職	数	171	14	19	55	41	34	8
	割合(%)	600.0	8.2	11.1	32.1	24.0	19.9	4.7
専業主婦	数	400	24	44	87	113	106	26
	割合(%)	100.0	6.0	11.0	21.7	28.3	26.5	6.5
検定		※0~10 11~14 15~18 $X^2=22.5309^{**}$ (常勤パート5時間以上)(0~13 15~18) $X^2=7.2310^{***}$ (常勤: 自営)(0~13 15~18) $X^2=4.2109^*$ (専業主婦パート5時間以上)(0~13 15~18) $X^2=10.6902^{***}$ (専業主婦: 自営)(0~13 15~18) $X^2=6.9549^{***}$ (専業主婦: 内職)(0~13 15~18) $X^2=4.0262^*$						
※栄養バランス得点		有意水準 * = 5% ** = 2% *** = 1%						

表5 子の栄養バランス得点

		朝食				夕食			
		国民栄養調査		本調査		国民栄養調査		本調査	
		数	割合(%)	数	割合(%)	数	割合(%)	数	割合(%)
		1,203	100.0	627	100.0	1,203	100.0	627	100.0
栄養 バ ラ ン ス 得 点	0	16	1.3	19	3.0	1	0.1	2	0.3
	1	18	1.5	24	3.8	3	0.2	5	0.8
	2	83	6.9	95	15.2	26	2.2	29	4.6
	3	234	19.5	178	28.4	118	9.8	91	14.5
	4	403	33.5	143	22.8	318	26.4	184	29.3
	5	336	27.9	117	18.7	416	34.6	185	29.5
	6	113	9.4	47	7.5	321	26.7	130	20.8
不明		0	0.0	4	0.6	0	0.0	1	0.2

た。朝食ではどの就労形態においても50~60%が3~4点であったが、5~6点の高得点者は常勤では32%で最も高く、2点以下の低得点者は自営、パート5時間以上、内職で約25%と高く、朝・夕食ともに内職の子の食物摂取には問題があると考えられる。

次に母の1日の得点と子の得点のかかわりを図2に示した。子の得点の分布は母の得点に比例し、高得点の母には高得点の子が多かった。子の栄養バランスは食事の作り手である母親に左右されることがわかる。

4%であった。また、朝・昼・夕食の合計点を1日の栄養バランス得点として母の就労形態とのかかわりを示したのが表4である。18点満点中10点未満の得点者が最も多いのはパート5時間以下で少ないのは専業主婦であった。13~14点ほどの就労形態も30%前後で、15~18点では専業主婦、常勤が高かった。特に常勤が17~18点で11.2%と高い割合を示したが、これは朝・昼食での高得点が貢献しているためと考えられる。

ii) 子の栄養バランス得点

子については給食があるため昼食を除き、前日の夕食と当日の朝食について母と同様の処理を行った。子の栄養バランス得点を表5に示した。夕食4点以上の得点者が79.6%であったが朝食では49.0%と低く、また2点以下は夕食が5.7%に対し、朝食では22.0%で朝食の栄養バランス得点は低かった。これを昭和57年国民栄養調査¹²⁾と比較すると朝、夕食ともに国民栄養調査より有意に低い値を示し、朝食の欠食者は国民栄養調査の1.3%に対し本調査では3.0%と高かった。母の就労形態別にみると、常勤、パート、自営、専業主婦の夕食における子の栄養バランス得点は5~6点が約50%、3~4点が約40%であったが、内職は5~6点が38%、3~4点が56%と有意に低かった。

iii) 母の食生活意識と栄養バランス得点

1日の栄養バランス得点と食生活意識とのかかわりをみると食事は栄養さえとればなるべく手間を省きたいと思っているものに得点の低いものが多く、テレビの料理番組をよくみて参考にするというものやわたし(母)の母は料理上手というものには栄養バランス得点の高いものが多かった。母の料理に対する関心度が栄養バランスに影響を及ぼしている。

4) 共食

i) 家族そろっての共食

ほとんど毎日家族そろって共食しているものは朝、夕食とも約50%

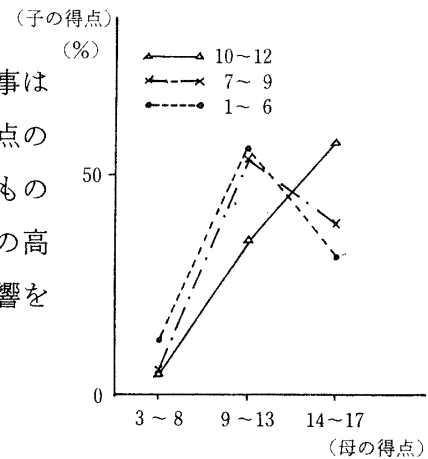


図2 母と子の栄養バランス得点

表6 就 労 形 態 と 共 食

	総数	朝食の共食状況					夕食の共食状況					
		割合(%)	ほとんど毎日 4~5日	週に 2~3日	週に 1日程度	ほとんど ない	割合(%)	ほとんど毎日 4~5日	週に 2~3日	週に 1日程度	ほとんど ない	
総数	985	47.8	7.2	10.0	17.5	17.5	50.6	12.1	16.2	16.4	4.7	
常勤	125	52.1	8.0	8.0	17.6	14.3	50.7	13.5	18.3	13.5	4.0	
パート5時間以上	105	54.3	5.7	5.7	18.1	16.2	54.9	11.5	10.6	16.3	6.7	
パート5時間以下	51	47.1	5.9	11.8	19.6	15.7	60.8	11.8	9.8	17.6	0.0	
自営	124	47.6	6.5	7.2	17.7	21.0	61.1	5.6	13.5	13.5	6.3	
内職	177	46.8	8.5	13.0	16.4	15.3	46.6	12.8	18.3	16.7	5.6	
専業主婦	403	47.8	7.2	11.2	17.4	16.4	46.5	13.6	17.6	18.1	4.2	
検 定		(常勤 パート5時間以下)(週に4~5日以上週に2~3日以下)									$X^2=4.0997^*$	
		(パート5時間以上 パート5時間以下)(週に4~5日以上週に2~3日以下)									$X^2=3.8499^*$	

*有意水準 5%

であるのに対し、ほとんど共食していないものは朝食で17.5%、夕食で4.7%で総体として夕食の共食が高かった。母の就労形態とのかかわりでは表6に示すように朝食と夕食では異なった傾向を示した。朝食では家族の生活時間が一致しやすいと考えられる常勤・パート5時間以上の共食が高かった。夕食では常勤、パート5時間以上、パート5時間以下、自営の順で共食の割合が高くなる傾向を示し、これは就労などによる時間の拘束性が低くなっていくと考えられる順位に一致する。専業主婦、内職は朝、夕食とも共食の割合は低かった。

母の栄養バランス得点は、朝食では共食回数が多いほど高く、共食が食物摂取に及ぼす影響は大きい。

ii) 子の共食

調査前日の夕食・当日の朝食についての共食状況は夕食の方がよく、家族全員で食べているものは50.7%であった。これに対し、ひとりまたは子どもだけで食べている子は朝食の30.3%、夕食の8.7%

で昭和57年国民栄養調査¹²⁾の朝食21%、夕食の3.5%に対して著しく高かった。また、これを母の就労形態別にみると夕食では自営、専業主婦を除いて他は50%以上が家族全員で共食しており、ひとりまたは子どもだけで食べているのは自営の17.6%、大人もいたが全員でないのは専業主婦の44.0%が最も高かった。朝食では家族全員で食べるのはどの就労形態も20%前後であったが、ひとりまたは子どもだけで食べるのは自営で最も多く、次いで専業主婦、常勤、内職の順であった。すでにのべたように高学年児童については、母子双方に解答を求めているが子どもの解答において子どもだけまたはひとりでの食事が朝、夕食とも多い自営、朝食に多い専業主婦、内職では母の解答による共食率は高く、母子間にずれがみられた。これは、子は母もいっしょに食べていたのを共食と考えるのに対し、母は単に食事の場または近くにいたことをも共食と理解していると思われ、共食についての認識の違いのあらわれと考えられる。これは足立ら¹³⁾が母がそばにいても孤食している子どもたちについて述べているのと同様な風景を思わせる。また、朝、夕食ともひとりまたは子どもだけで食べているのは図3に示すように4.7%でこれは足立ら¹³⁾の調査と比較してかなり低い。

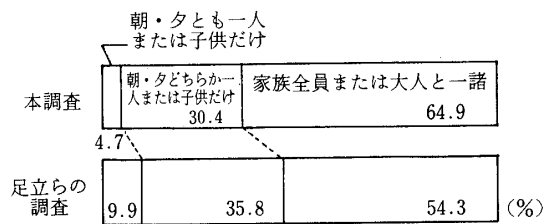


図3 朝・夕食の共食

5) 健康に関する自覚症状

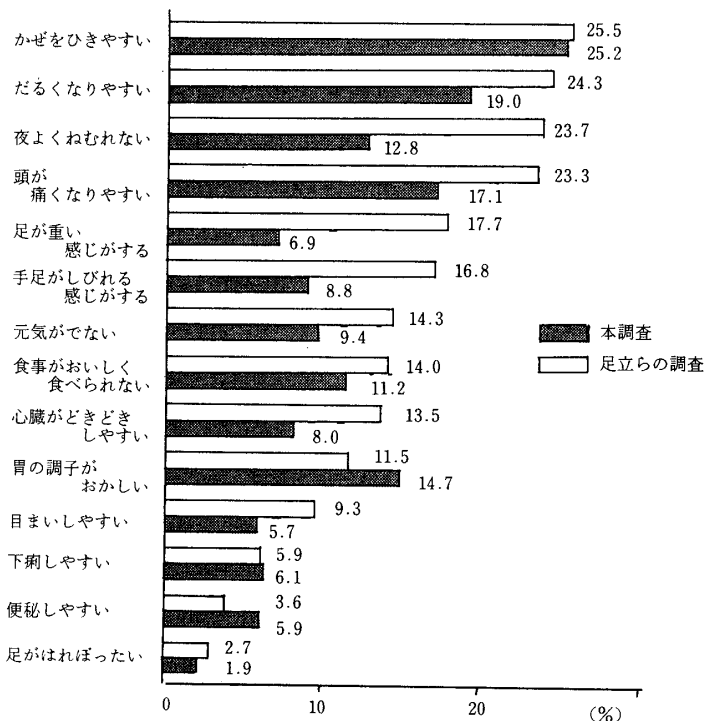


図4 子の自覚症状

子の自覚症状は図4に示すようにかぜをひきやすいと答えたものが25.2%で最も多く、次いでだるくなりやすい、頭が痛くなりやすい、胃の調子が悪いの順であった。足立ら¹³⁾の調査ではかぜをひきやすいが最も多く、本調査と一致したが、胃の調子がおかしい、便秘しやすい、下痢しやすいの消化器系では本調査の方が高い割合を示した。また1人当たり発現個数をみると0個のものが41.2%、1個21.7%、2~3個22.6%、4個以上14.5%で足立ら¹³⁾の0個33.9%、1個20.6%、2~3個25.6%、4個以上19.9%より本調査の方が若干低いものの4個以上が14.5%に達するという事は子どもの健康上問題があると考えられる。

また、母の自覚症状は便秘しやすい、目まい、立ちくらみがする、頭痛がおきやすいの3項目にそれぞれ26.9%、24.1%、23.0%と高い割合を示した。母の就労形態との関連はみられなかったが、表7に示すように栄養バランス得点とは関連がみられ、自覚症状の発現個数が高いものほど栄養バランス得点が低い傾向を示した。

表7 栄養バランス得点と自覚症状

		自覚症状の発現個数					
		0	1	2	3	4	5
栄養 バ ラ ン ス 得 点 (点)	総数	1016	403	253	152	94	114
	割合(%)	100.0	39.6	24.9	15.0	9.3	11.2
	2~8	77	21	21	11	10	14
		100.0	27.3	27.3	14.2	13.0	18.2
	9・10	126	41	36	19	12	18
		100.0	32.5	28.6	15.1	9.5	14.3
	11・12	250	92	68	35	26	29
	100.0	36.8	27.2	14.0	10.4	11.6	
13・14	288	124	66	48	27	23	
	100.0	43.1	22.8	16.7	9.4	8.0	
15~18	275	125	62	39	19	30	
	100.0	45.5	22.5	14.2	6.9	10.9	

$X^2=21.8600*$

検 定 2~12 : 13~18※ $X^2=14.4785**$
 0 : 1~ ※※ $X^2=13.7067**$

※栄養バランス得点 ※※自覚症状の発現個数 有意水準*=5% **=1%

表8 自覚症状一母と子のかかわり

		母の発現個数			
		0	1	2	3
子 の 発 現 個 数	総数	605	247	232	126
	割合(%)	100.0	40.8	38.4	20.8
	0	251	119	86	46
		100.0	47.4	34.3	18.3
	1・2	216	74	102	40
	100.0	34.3	47.2	18.5	
3・4	84	30	32	22	
	100.0	35.7	38.1	26.2	
5~	54	24	12	18	
	100.0	44.5	22.2	33.3	

検 定 $X^2=21.3709*$

*有意水準 1%

自覚症状について母と子のかかわりをみると表8に示すように母の発現個数が高いと子も高い傾向がみられ、既にのべた栄養のバラ

ンスにおける母と子のかかわりを考え合わせると母の食事管理は母自身だけでなく、子の健康に大きな影響を与えていることがわかる。

6) 食生活意識

i) 家族外食と母の意識

母からみた私・夫・子の外食指向をみると「子は外食がすき」67.5%、「私は外食がすき」46.0%、「夫は外食がすき」14.7%で総体的に外食指向は子が最も高く、次いで私、夫の順であった。実際の家族外食と家族それぞれの外食指向とのかかわりは表9に示すようで、外食がきらいで月1回以上家族外食をしているものは母の16.5%に対し、夫と子はそれぞれ34.6%、39.6%と約2倍で家族外食は母の外食指向に大きく左右されるものと思われる。外食は不経済である・手軽な外食店がほしいの2問に対する母の回答をみると、外食は不経済であると考えているのは80.9%、手軽な外食店がほしいと考えているのは16.8%であった。これを家庭外食とのかかわりでみると、不経済と考えている場合

表9 家族外食と家族の外食指向

		私(母)は外食が好き			夫は外食が好き			子は外食が好き		
		はい	どちらでもない	いいえ	はい	どちらでもない	いいえ	はい	どちらでもない	いいえ
総	数	464	454	91	145	363	380	684	243	86
	割合(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
家 族 外 食	めったにしない・年数回	183	284	76	56	165	314	355	139	52
		39.4	62.6	83.5	38.7	45.5	65.4	51.9	57.2	60.4
月1回以上		281	170	15	89	198	166	329	104	34
		60.6	37.4	16.5	61.3	54.5	34.6	48.1	42.8	39.6

検 定 私(母)は、外食が好き : 家族外食 $X^2=84.8320*$
 夫は外食が好き : 家族外食 $X^2=49.6803*$

*有意水準0.1%

に家族外食は少なく、不経済と考えていない場合には多くなる傾向を示した。

外食が子どもに及ぼす影響について栄養上よくないと考えている母は55.2%，教育上よくないと考えている母は59.0%と外食は子どもによくないと考えている母が過半数で，母が栄養上・教育上よくないと考えている家族の家族外食は少ない傾向を示した。子の75.9%は食事を母に作ってもらうことを望んでいたが，夫は外食がすき，手間を省きたい，子は外食が好き，手軽な外食店がほしいと答えている母の子は外食指向が高く，テレビ料理をよくみる，母は料理上手と答えている母の子は外食傾向が有意に低かった。しかし，栄養上・教育上外食は好ましくないに「はい」と答えている母の子と「いいえ」と答えている母の子の間に外食指向の差は認められず，先に述べた家族外食とは異なり母の影響はほとんど認められなかった。

ii) 母の食生活意識と母の就労形態

表10 母の食生活意識と就労形態

	母の食生活意識 高い→低い			
家族そろって外食をするのが好き	II	IV	III	I
食事は栄養さえとればなるべく手間を省きたい	III	II	IV	I
テレビの料理番組をよく参考にする	I	III	IV	II
料理の本はよく見る	I	III	IV	II
献立をたててから買物をする	I	IV	II	III
子供の栄養という点からふだんの外食は望ましくない	I	II	IV	III

I…専業主婦 II…常勤 III…内職 IV…パート・自営

母の食生活意識を経済・栄養・社会活動の3つの側面から22項目を設定し，まずそれらと就労形態のかかわりを検討してから有意差の認められた6項目を選定した。これと栄養バランス得点によりグループ分けした4群すなわち専業主婦，内職，パート・自営，常勤とのかかわりから食事作りへの関心度の順位づけを試みた。表10に示すように専業主婦は料理好きであり，手間を省きたいという意識が高く，パート・自営は中間で，内職は料理に関心はあるものの栄養に対する関心が低く，手間を省きたいという特徴ある傾向を示し，就労形態と栄養バランスと食生活意識には深いかかわりがみられた。

4. 要 約

本研究は，外部化し多様化が進む食生活において，母の就労形態が家族の食行動と食生活意識にどのような影響を及ぼしているかについて小学生とその母親の調査を行い，母の就労形態が家族外食，栄養バランス得点，共食，食生活意識との間に深いかかわりがあることを明らかにした。

1) 母の昼食は家庭内食が多く，就労形態別には専業主婦，内職，自営の外食は少なかった。外食は常勤，パートでは勤務先食堂，専業主婦，内職ではレストラン・飲食店，自営は出前，できあい弁当が多く，就労形態による相違がみられた。

2) 朝・昼・夕食別では，朝・夕食において専業主婦，昼食においては常勤に栄養バランスの高得点者が多かった。1日の合計においてもこの両者は得点が高く，特に常勤は昼食の高得点の影響が大きかった。子の栄養バランスは母の影響をうけ，母が高得点の場合子ども同様の結果を示した。また，就労形態においても差がみられ，内職の子は得点が有意に低かった。

3) 家族そろっての共食は朝食に少なく夕食に多かった。常勤・パートなどに共食が多く，専業主婦・内職の共食が少なかった。また，共食率が高いほど栄養バランスは良好であった。

4) 健康に関する自覚症状は就労形態との関連はみられなかったが，栄養バランスが悪い場合は自

覚症状の発現個数が高かった。また、子の自覚症状は他調査にくらべ消化器系に異常を訴えるものが多く、自覚症状の発現個数が高い母の子は同様に高かった。

5) 家族外食は多くはなかったが、その中で比較的多いのが常勤、自営、少ないのは内職、中間がパート・専業主婦で世代家族より核家族の方が多かった。外食を好むのは母は子、私、夫の順と考えているが、子は母の手料理を望んでいる割合が高かった。また、家族外食は母の意識に大きく左右されると考えられた。

母が家族外食を不経済と考えたり、子の栄養上・教育上よくないと考えている場合には家族外食は少なかった。手間を省きたい・夫は外食が好きと答えている母の子は外食指向が高く、母は料理上手・テレビの料理番組をよくみると答えている母の子は外食指向が低かった。

母の意識6項目間で食事づくりへの関心度をみると、専業主婦は料理好きであり、栄養に高い関心を示し、常勤は家族外食が好きであり、手間を省きたいという意識が高かった。しかし、常勤であっても外食はそう多いものではなかった。

パート・自営の意識傾向は中間に位置したが、内職は栄養に対する関心が低く、手間を省きたいなど特徴のある傾向を示した。

最後に本研究にあたりご協力いただいた岐阜市内3小学校の教職員ならびに児童とその母親の皆様
に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 相澤常夫他：第33回日本栄養改善学会講演集，健康づくりみなおそう食卓を，356，357，1986
- 2) 互家千代子他：第33回日本栄養改善学会講演集，調理済み食品利用についての調査，240，241，1986
- 3) 谷田沢典子他：聖徳学園女子短期大学紀要第11集，食の外部化に関する研究第一報外食の一般状況，55～73，1985
- 4) 草野愛子他：聖徳学園女子短期大学紀要第11集，食の外部化に関する研究第二報学生の外食について，75～87，1985
- 5) 総務庁統計局：昭和57年家計調査年報，110，1982
- 6) 総務庁統計局：昭和58年家計調査年報，110，1983
- 7) 総務庁統計局：昭和59年家計調査年報，100，1984
- 8) 総務庁統計局：昭和60年国勢調査第2巻第1次基本集計結果その1全国編，105，129，137，1985
- 9) 総務庁統計局：昭和60年労働力調査年報，95，1985
- 10) 佐藤玲子他：第33回日本栄養改善学会講演集，東北地方における食生活の研究（第8報），214，215，1986
- 11) 国民生活センター：第14回国民生活動向調査，22，1984
- 12) 厚生省保健医療局健康増進栄養課編：昭和59年版国民栄養の現状，143，1984
- 13) 足立己幸，NHK「おはよう広場」班：なぜひとりで食べるの，1985